

英語学習と電子辞書

Electronic Dictionary in Learning English

長谷川 誠

HASEGAWA Makoto

0. はじめに

近年の電子辞書の普及はめざましいもので、カシオ計算機の公表資料によると、電子辞書は、1997年の110万台が、1998年には180万台に、さらに1999年には300万台へと爆発的に売れ行きがのびた。そして、2000年、2001年の330万台をピークに縮小傾向にあるが、それでも年200万台以上が売れている。電子辞書の普及により、英語の授業に電子辞書を持参する学生数は、クラスの過半数を占めることも珍しくなくなっている。電子辞書を持参する学生が増えると、それに比例して、学生にとっては、電子辞書とは予習をせずに授業に臨んでも、当てられてから考えている振りをして片手でちょこちょこ調べれば、たちまちわからない語の意味を教えてくれ、何とかその場を切り抜けさせてくれる魔法の道具のようなものでしかないのではないか、と思わせられる場面に遭遇することも多くなっている⁽¹⁾。さらに、その魔法の道具を試験中にも利用しようと試みる者が現れることは、当然予想されることであり、片手が机の下でもぞもぞと動く現場を、不本意ながら押さえる羽目になることも時にはあるのである。

電子辞書の普及は、高等学校用の検定教科書を使用する授業では、興味深い変化をもたらしてきている。ここにきて、電子辞書の普及と反比例するかのようになり、いわゆる「虎の巻」を授業に持ち込むものが減少しているのである。「虎の巻」はそれを作る人達にとっては勉強になるけれども使う人には勉強にならないから使わないように勧め、それでも使いたい者はせめて家で予習をするときに使うようお願いしていたのだが、それでも、少し前は、授業中に使う者はあまり減らなかった。現在、「虎の巻」と電子辞書の両方で完全武装する者もいるが、ほかに情勢の変化をもたらすようなことは特になく「虎の巻」の授業中の使用が減少しているのは、実際問題として、「虎の巻」と電子辞書の両方を同時に使うことはできないから、どちらか一方のみにしようということで、「虎の巻」をやめ電子辞書を選択していると考えていいのではないだろうか。つまり、電子辞書と「虎の巻」の利用価値は同じである、と考えられているのであろう。

恐らくこのような状況は、どこでもそれほど変わらないのではないかとと思われる。電子辞書の使用を校則で禁止している学校もあるようであるが、その理由の中には、予習がおろそかになるということも含まれているのではないだろうか。電子辞書そのものが良くない、と考えている教師は恐らく一人もいないだろう。しかし、それを英語学習にどのようにして取り込んでいけばいいかということにな

ると、その答えは簡単には出ない。本稿では、このような現実の中で、英語学習の中で電子辞書の持つ特徴を生かせるような利用法がないかを考えてみたい。

1. 電子辞書のいろいろ

国産の電子辞書の歴史は、1979年にシャープから発売されたIQ-3000から始まる。まだ、その歴史は30年にも満たないが、コンピューターの場合と同様、その進歩はめざましいものである。コンピューターの場合は、まさに日進月歩の発達で、半年もすればニューモデルが次々と発表され、5年前のモデルと同程度の性能のものが新品として市場に出回ることはない。電子辞書の場合も短期間にめざましい進歩を遂げたという点では似ているが、違うところは、現在のモデルからすると、性能の劣るようなものも新品として市場に流通しているところである。このため、ただ電子辞書というだけでは、どのようなものを指しているのか人によって異なることがあり得る。そこで、混乱を避けるためにも、電子辞書の発達の歴史を簡単に振り返ってみよう。

電子辞書の発達の歴史は、大まかに言って、価格とメモリー容量、携帯性と見やすさ、という相反する要求をいかに調和させるかの歴史であると言えよう。現在市販されている電子辞書には様々なものがあるが、このような観点から大きく分けると、簡略版とフルコンテンツ版の2つのタイプに分けられる。それでは、電子辞書の歴史を簡単に振り返ってみよう。

簡略版の出現

電子辞書が初めて出現した頃は、メモリーも液晶画面も高価であったため、価格を抑えるためにはメモリー容量をできるだけ少なくし、画面も必要最小限にする必要があった。このため、国産第一号機であるIQ-3000について見ると、収録語数は英和が2800語、和英が5000語で、受験用単語集に毛が生えたような語数で、画面は16桁×1行の液晶マトリックス表示で、日本語訳はカタカナで表示された。IQ-3000は、「電子辞書」ではなく、「電訳機」と呼ばれていたことからしても、紙の辞書に取って代わることをめざしていたわけではないと推測される。

メモリーも液晶画面もともに価格が下がってくると、内容の乏しさと表示の読みにくさの改善に取り組むことが可能となってきた。高校生を対象とする紙の辞書とほぼ同等の語数を収録し、訳語が漢字仮名交じりで表示されるタイプが登場してきた。その代表は、1987年にサンヨーから発売された「電字林」でほぼ高校初級用の英和辞典並みの約35000語を収録し、英和のみが標準装備で、和英は別売りのICカードで追加するものであった。

「漢字仮名交じり表示」「高校生向け辞書程度の収録語数」「訳語のみを表示」という電字林のコンセプトは、後に、電子手帳の英和・和英ICカードなどにも採用されていき、現在でも、いわゆる「非フルコンテンツ電子辞書」にはそのまま受け継がれている。

フルコンテンツ版の登場

電子辞書といえば、普通は、ICを使った電子辞書のことを指すが、広い意味では電子ブックプレーヤーも含めて考えていいだろう。電子ブックプレーヤーは、現在のIC電子辞書にもそのアイデアが取り入れられるような様々な先進性を備えていた。

電子ブックプレーヤーの第一号機は、1990年にソニーから発売されたDD-1である。DD-1には、ニューセンチュリー英和辞典＋新クラウン和英辞典という高校生用の英和・和英辞典が、初めてフルテ

キストで収録されていた。電子ブックプレーヤーは、8センチCD-ROMを専用のケース（キャディー）に納めた電子ブックというメディアを再生する液晶画面とキーボードを持つ装置で、様々な電子ブックソフトを差し替えて再生することができた。電子ブックという200MBの外部メモリーにデータを保存するという方式を採用することで、本体のメモリー容量はそれほど増やさず、小型のままで、扱える情報量を飛躍的に増大させることが可能となった⁽²⁾。

電子ブックは、紙の辞書の内容をそのままにフルテキストで収録し、その検索方法は、「単語検索（前方一致）」、「単語検索（後方一致）」、「条件検索」（事実上は、最大5語を用いた例文検索）の3種類だった。条件検索で目的の例文が見つからない場合には、単語検索で見出し語を検索し、その後は、スクロールして全ての情報のうちから必要な情報を探し出さなければならなかったのも、小さな液晶画面では見にくかった。

また、電子ブックは、液晶画面を持たず、コンピューターに接続する電子ブックプレーヤーDD-DR1が登場すると、専用の検索ソフトを使うことによって、コンピューターでも使用することが可能になった。また、コンピューターにCDドライブが標準で装備されるようになると、CD-ROMをキャディーから取り出し、そのままコンピューターで使用することも可能になった。電子ブック版の英語辞書は、研究社の新英和・和英中辞典、大修館のジーニアス英和辞典という定番の学習英語辞典も発売され、電子ブックプレーヤーのみならずコンピューターを用い、大きな画面でも利用され、後にコンピューターで使用する12センチのCD-ROM版の辞書ソフトを生み出すこととなった。

1991年に、IC電子辞書では初めて、紙の辞書を丸ごと収録したタイプ（フルコンテンツタイプ）の、セイコー電子工業のTR-700が登場した。これには、研究社の新英和・和英中辞典とRogetの類語辞典の本文が丸ごと収録されていた。

紙の辞書の内容を丸ごと収録することで、情報量が増え、限られた液晶画面では見にくくなった。TR-700では、単語を検索すると、見出し語の候補として見出し語および見出し語を含む熟語が表示され、見出し語を選べると、その後に、紙の辞書にある内容のうち例文、解説を除く内容が表示される。熟語には、見出し語を選択した後でも、必要に応じて、shift、スクロールでジャンプすることが可能であった。例文、解説は、語義の小見出しの下位フォルダーの中に入れられていて、必要に応じて、本体にある、「例文」、「解説」を開く独立したボタンのキー操作によって参照する、という表示・検索方式が初めて導入された。この方式は、TR-700の液晶画面が、1行の幅は電子ブックプレーヤーよりは多少広いが、行数は電子ブックプレーヤーの10行の半分にも満たないたったの4行しかなく、さらに、電子ブックプレーヤーでは利用できる頁スクロールの機能がなく、という弱点を補う必要から生まれたものかもしれないが、電子辞書の発達の上で、画期的な方式だといえることができる。後に電子辞書の画面が大型になっても、フルコンテンツタイプの電子辞書では、この方式が受け継がれている。

電子辞書の進歩とは、限られたメモリー容量で、既存の紙の辞書をいかにして取り込むかという取り組みであると考えれば、フルコンテンツタイプの電子辞書の登場によりその目標を達成したと言える。これ以降は、それぞれのメーカーで使いやすさの工夫はなされていても、進歩の名に値する辞書は現れていない。今後、電子辞書の進歩があるとするならば、既存の紙の辞書を移植するのではなく、電子辞書という、いわばミニコンピューターのハードの特性を生かすようなオリジナルな英語辞書の編纂によってのみ可能となるのではないだろうか。

2. 紙の辞書と電子辞書

現在、電子辞書には1で見たような2つのタイプが存在している。その一つ、簡略版は、日常目にする英語の訳語を知りたいような場合や、あるいは暗記用の単語帳として、用いられることを想定していると思われる。このタイプでは、例えば、CASIO XD-90の場合は、コンパクトな本体に英和辞典としては三省堂のニューセンチュリー英和辞典を搭載しているが、収録語数は見出し語約47,500語で、用例や解説は省略され訳語が約64,500語納められているだけである。しかし、同様に、新クラウン英和辞典と三省堂国語辞典も搭載されており、実用辞典の特徴を打ち出している。また、SEIKO SR310では、研究社のPocket英和が搭載されているが、自分専用の暗記用「単語帳」を「見る」「作る」機能と、楽しみながら単語を覚える「ゲーム」の機能もあり、暗記用に特化している。もう一つが、紙の辞書の内容を丸ごと収録する、フルコンテンツタイプの電子辞書である。本稿では、電子辞書とは、このフルコンテンツタイプの電子辞書のみを扱うことにする。

紙の辞書と電子辞書の違いは何であろうか。両者の違いについては、web上にいくつか文献やすでに使用している人によるQ&Aがあるが、まだ研究は始まったばかりである⁽³⁾。これらのうちには、極端な場合には、「紙の辞書には、例文がきちんと載っていて、どの単語を使って訳せばいいのか」わかるが、「電子辞書ではただ意味」しか書いてない、というような記述も見られるように、「紙の辞書」と「電子辞書」というメディアの違いの比較のほすが、実際には、2つの異なる辞書の比較になってしまっているものもある。つまり、中型の学習用英和辞典と小型の海外旅行用の英和辞典というような、異なる辞書内容の比較のようなことになってしまい、「紙」か「電子」かというメディアの違いは、意味がなくなってしまうものもある。また、これとは逆に、「紙」か「電子」というメディアの違いを論じるはずが、「紙」は電池が要らないが「電子」は電池がいる、「紙」は壊れにくい「電子」は衝撃で壊れる、「紙」は見開き2頁が一度に見渡せるが、「電子」では、液晶画面が小さいから一覧性が劣る、「紙」に比べて「電子」の方が高価である、「紙」よりも「電子」の方がかさばらず携行性に優れている、というようなハードとしての違いに目がいってしまっているものもある。どういった紙の辞書とどういった電子辞書を対象にしているかを明確にし、メディアによる違いを論じているものは、筆者の調べた限り、皆無と言ってい。

そこで、本稿では、電子辞書に収録される英和辞典の定番とも言える「ジーニアス英和辞典」と「ジーニアス英和大辞典」を搭載している、電子辞書の主なメーカー5社の同レベルだと思われる機種を対象として調査し、紙の辞書と電子辞書の違いとその活用法について考察する。

本稿では、「ジーニアス英和辞典(G3)」を搭載するものとして、CASIOのXD-6500, XD-R1300, XD-S800, SONYのEBR-S8MS, CANONのIDF-4600の5機種を、「ジーニアス英和大辞典」を搭載するものとして、CASIOのXD-9100, SONYのEBR-S7MS, SHARPのPW-A8800, SEIKOのSR-T7100の4機種を取り上げた。それぞれの同一コンテンツについて、電子辞書の5大メーカーの機種を揃えることはできなかったが、それぞれのメーカーの特徴は捉えられると思われる。

電子辞書の最大の弱点といえば、本体を小型軽量にしななければならないことから画面も小さいことである。そこで、まず、それぞれの機種の表示画面について見てみる。XD-9100は、17または13行+1行、XD-6500は、17または13行+1行、XD-R1300は、17または13行+1行、XD-S800は、9または7行、EBR-S7MSは、10、7または5行、EBR-S8MSは10、7または5行、PW-A888は、18、15、12または8行+1行、SR-T7100は、17、13、または8行+1行、IDF-4600は、11または8行となっている。各機種とも、文字サイズを大小選べるようになっている。本体の大きさの違いに伴う画面のサイズの違いによって、最小文字の場合に、最大17行から最小9行まで2倍近い大きな差があるが、紙の

辞書との比較で言えば、どれも似たようなものと考えて差し支えないだろう。

電子辞書の最大の弱点を克服しようという試みの一つが、検索方法だといえる。そこで、それぞれの機種 of 英和辞典に關係する検索方法を見ておこう。XD-9100の検索は、英和+スペルチェック+成句検索+例文検索の4項目4行（英和に1文字入力するごとに、その文字列またはそれよりも先にある一番近い見出し語からその5項目先の見出しまでを候補としてあげ、その下に先頭の見出し語のプレビューを表示する。シフト+例文検索でスタートすると、例文検索または成句検索の入力画面になり、英英辞典、ジーニアス英和大辞典、アクティブータ、英和活用大辞典、英会話とっさのひとこと辞典から例文検索を、リーダーズ、英英辞典、ジーニアス英和大辞典から成句を検索することができる）、XD-6500 の検索は、英和+スペルチェック+成句検索+例文検索の4項目4行（英和に1文字入力するごとに、その文字列またはそれよりも先にある一番近い見出し語からその5項目先の見出しまでを候補としてあげ、その下に先頭の見出し語のプレビューを表示する。シフト+例文検索でスタートすると、例文検索または成句検索の入力画面になり、英和辞典、英英辞典、英会話Make it!、英会話とっさのひとこと辞典から検索できる）、XD-R1300の検索は、英単語のみ1行（スペルチェック、成句検索は、それぞれshift+英和、shift+和英で、同じく1行、いずれも、画面下にヒストリーサーチを表示）、XD-S800の検索は、英和+スペルチェック+成句検索の3項目3行、EBR-S7MSの検索は、英単語+成句+用例の3項目3行（それぞれについて、1文字入力するごとに、その文字列までを含む英単語が存在する場合には、その文字列から9項目先の見出し語までを候補として表示する。検索文字列を変えるときは、「戻る」で1文字ずつ削除するが、このときも1文字削除するごとに、文字を増やしたときと全く同じプロセスを逆に行っていくため、非常に遅く感じられる）、EBR-S8MSの検索は、英単語+成句+用例の3項目3行（それぞれについて、1文字入力するごとに、その文字列までを含む英単語が存在する場合には、その文字列から9項目先の見出し語までを候補として表示する。検索文字列を変えるときは、「戻る」で1文字ずつ削除するが、このときも1文字削除するごとに、文字を増やしたときと全く同じプロセスを逆に行っていくため、非常に遅く感じられる）、PW-A88の検索は、英単語1行（初期画面で、成句を選択すると3単語3行入力画面となり、スペルを選択すると1行の入力画面になる。例文検索は、別ボタンで選択し、3単語3行入力画面となり、spelling検索の対象は、リーダーズ英和&プラス、英和大辞典、和英、英和活用、英英、類語、英文ビジネスレター、とっさのひとこと、である）、SR-T7100の検索は、ジーニアスのボタンで、英和+成句の2行と単語帳、凡例1行（英和に1文字入力するごとに、その文字列またはそれよりも先にある一番近い見出し語からその5項目先の見出しまでを候補としてあげ、その下の囲みに先頭の見出し語のプレビューを表示する。例文検索は別ボタンでスタートし、英和優先+英英優先の2行で、リーダーズ英和辞典、リーダーズ・プラス、ジーニアス英和大辞典、英和活用大辞典、新和英中辞典、オックスフォード現代英英辞典、コンサイスオックスフォード類語辞典から、検索可能で、結果表示は、ジーニアスの場合と同様である）、IDF-4600の検索は、1行である（英和か成句かを選択すると、1文字入力するごとに、その文字列またはそれよりも先にある一番近い見出し語からその7項目先の見出しまでを候補として表示する。例文検索は見出し語を検索した後でしかできない）。以上から、電子辞書の中には、紙の辞書では不可能な、例文・用例検索という検索方法を利用しているものがあることがわかる。以下、この検索方法が英語学習にどのような変化をもたらしうるかを考察する。

英語学習と辞書指導

これまでの英語学習における辞書指導は、十分には行われていなかったかもしれない⁽⁴⁾。これには、それなりの理由もある。辞書指導は、中学校で英語の授業が始まるときに系統的にできればよいのであろうが、実際問題として、不可能である。名詞の複数形の作り方も、動詞の現在形・過去形の変化も、比較級・最上級の変化も知らない者に対して、辞書の見出しは、原形、原級など基本となる形で記載されている、というような基本の基本を教えることはできないからである。このため、入門期に辞書の調べ方について指導が行われたとしても、英語の辞書の見出しも、国語辞典の見出しと同様に、先頭の文字がアルファベット順に並んでいて、二番目の文字も、三番目の文字も同様にアルファベット順に並んでいるから、アルファベットの順番を、最初から言ってみなくても、どの文字がどのあたりにくるのかすぐわかるくらいしっかり覚えないと、将来困ります、と説明し、実際に辞書の配列を見せるくらいで、後はアルファベットの暗唱・書き方練習に移ることになるのではないだろうか。この先は、興味のある者だけが、例えば、名詞の単数形・複数形を学習したら、目にする_sで終わる語が、どんな形で見出し語に出ているのか確認したり、過去形を習ったら、_edで終わる語の見出しを探したりしているうちに、徐々に身に付いていくのではないだろうか。それほど興味が持てなくて、教科書の巻末にある「単語リスト」で済ましてしまった者は、いつまで経っても辞書を引くことはできないでいる。高校生や大学生になっても、規則変化の動詞で原形が発音しないeで終わる語などの場合には、_edや_ingが付いていると、見出し語を見つけない者が時にはいる。

変化している語の見出しを見つけれられるようにするには、規則変化の復習を必要に応じて行えば対処できるが、熟語や成句となると簡単にはいかない。紙の辞書では、検索は全て見出しの語から始めなければならない。熟語や成句の場合には、どの語の見出しの下に収録されているかの判断をするにはかなりの経験とカンが必要とされる。そのような指導を短時間で行うことは難しいだろう。

英語学習と電子辞書

電子辞書と紙の辞書の最大の違いは、電子辞書には、今回の調査の対象となった全ての機種に共通に備わっている⁽⁵⁾、画面上の任意の語について調べたい場合に、そのとき使用している辞書および内蔵されている他の関連する辞書へ素早く移動できるジャンプ機能があることと、現在のところ全ての機種に備わっているものではないが⁽⁶⁾、見出し語からばかりでなく、成句やさらには例文からも語義を調べられる検索機能がある、という2点だと筆者は考えている。この機能を使うことによって、初心者でも、時間をかければ、成句や熟語を含むような英文でもその意味を調べることができるのである。

英語学習において、辞書を使う主な場合は、英文を読んでいるうちに未知の表現に出会ったとき（英和辞典）と何かを英語で伝えたいが、どのように言うか分からないとき（和英辞典）である。まず、辞書を引くと言えば思い浮かべるのは英和辞典であるから、英文を読む場合から考えよう。未知の語が出て来て、その意味を知りたい場合は、ただその語を調べればよいのであるが、面倒なのは個々の語は知っていても全体の意味が分からない、という場合である。例えば、次に挙げる成句・熟語を含む文に出会ったとしよう。

have to do with, do away with, put up with, come up with, keep O on O's toes, in one way or another,
have O's blood on one's hands, have the game in one's hands, be dead on one's feet, by the head and shoulders,
have a head on one's shoulders

紙の辞書では、それぞれの場合に、どの見出しの下で扱っていそうかをまず考えて、可能性の高いものから当たっていくことになる。電子辞書では、例えば、have to do withの場合には、have&to&do&withで検索するばかりでなく、do&have, have&to, have&with, do&withの組み合わせ、さらには、to&withでさえも検索することができる。もちろん、条件となる語の数が多いほど、候補は絞り込まれる。ここで重要なことは、成句や熟語をあらかじめ知っている必要はない、ということである。ここでは、成句・熟語として扱われることが分かっている表現を例としたが、文中によく分からない表現がでてきたときには、とりあえず、そこに含まれる語を数語（機種によって語数に制限があるものもあるが）&でつないで検索してみればいいのである。条件となる語が少ない場合は、結果として表示される文または句の数は多いかもしれないが、成句・熟語が含まれるときには、その文・句の中に必ず目指す表現が含まれているのであるから、後は根気よく画面をスクロールすればいいのである。その結果の中に該当するものがない場合に初めて、紙の辞書の場合と同じように、見出しの単語の検索を行えばいいのである。

in one way or anotherのように、その中に変化する語を含まない場合には、検索上特に問題はないが、toes, hands, feet, shouldersのような変化形を含む場合には、機種により注意が必要である。例えば、keep O on O's toesの場合では、XD-9100、XD-6500、EBR-S8MS、SR-T7100では、keep&toeでもkeep&toesでも検索でき、結果表示はどちらもkeep O on O's toesとなるので、使いやすい。XD-R1300、XD-S800、EBR-S7MS、PW-A8800は、keep&toeならば検索できるが、本来の形であるkeep&toesでは、該当表現なし、となってしまう。EBR-S7MSの場合は、入力の中でも該当表現を表示するので、toe/toesのように単に_sが付くだけの変化の場合にはsを入力する前の画面で確認できる。IDF-4600では、本来の形であるkeep&toesならば検索できるが、keep&toeでは、該当表現なし、となってしまう。また、by the head and shouldersとhave a head on one's shouldersの場合は、XD-9100とSR-T7100では、head&shoulderとhead&shouldersのどちらでも両表現を検索できるが、XD-6500、XD-1300、XD-S800、EBR-S8MSでは、head&shoulderとhead&shouldersのどちらでも、have a head on one's shouldersは検索できるが、by the head and shouldersは検索できない。また、EBR-S7MS、PW-A8800では、head&shoulderならば両表現を検索できるが、head&shouldersでは両表現は無く、be head and shoulders above O₁ in O₂だけである。さらに、IDF-4600の場合は、head&shoulderでは両表現とも検索できず、head&shouldersでもhave a head on one's shouldersの方だけしか検索できない。また、be dead on one's feetの場合は、XD-9100、EBR-7MS、PW-A8800、SR-T7100ではdead&foot/dead&feetのどちらでも検索できたが、XD-6500、XD-R1300、XD-S800、EBR-S8MS、IDF-4600ではdead&foot/dead&feetのどちらでも検索できなかった。

以上の検索結果を総合して考えると、現在の電子辞書には、検索に関してまだ解決しなければならない問題があることが分かるが、とりあえず、このようにして、成句を含むような文でも時間をかけて検索結果を見ていけば、目指す表現にたどり着くことができる。例文検索の機能がある機種ならば、成句を含まなくても、調べたい文と似た文を探し出すこともできる。

次に役に立つのが、ジャンプ機能である。検索した成句や文は全体の意味は出ていても、そこに含まれる語の意味がよく分からなくては、深く理解することはできない。そこで、知らない語がある場合には、その語にジャンプしてその意味を調べるのである。こうしてその文中に知らない語が無くなったならば、検索した英文とその意味を照らし合わせれば、知りたかった表現の意味が分かるのである。このような辞書の使い方の指導ならば、英語を学び始めたばかりの初心者に行える。

もう一つの辞書を使用する場面では、使用する辞書はこんどは和英辞典である。昔の和英辞典は、和英辞典でひいた英語をもう一度英和辞典でひき直さなくては使えないものであった。「和英辞典でひいた英語をもう一度英和辞典でひき直さなくてもよいような和英辞典を作る⁽⁷⁾」ことを目指して作られたのが、「ライトハウス和英辞典」であり「ジーニアス和英辞典」なのである。「ジーニアス英和辞典」は、まえがきで、「和英辞典に英和辞典の機能を組み入れ、英和辞典と和英辞典の融合を目指した第一歩の試みなのです。・・・英和辞典、特に「発信型」を特徴とする「ジーニアス英和辞典」を「裏返し」にして和英辞典として利用できないかと思った方も多いのではないのでしょうか。この長年の夢－和英辞典を引き直さなくてすむ「役に立つ和英辞典」の出現－が、今回、コンピュータ技術の助けも借りながら、ようやくかなうことになったのです」と明確に述べている。つまり、複数の辞書の間でのジャンプ検索のような機能の必要性は、今から20年以上も前に認識され、実際に和英辞典に取り入れられてきているのである。そこで、電子辞書になっても、これまで以上の新たな辞書指導は必要ないであろう。

電子辞書の多くが、複数辞書検索機能を備えていることは電子辞書の有用性を大いに高めるものである、と言える。また、「ライトハウス和英辞典」や「ジーニアス英和辞典」のような和英辞書の使いやすさもよく知られている。しかし、この2つを組み合わせると、必ずしも良くなるとは言えない。今回対象としている電子辞書のうち、SR-T7100を除く全ての機種に「ジーニアス和英辞典」が搭載されている。このため、例えば、「励む」という意味の語を知りたくて和英辞典を引くと、見出しとしてstriveが挙げられ、その語義およびともに使う前置詞、to 不定詞をとることなどの説明があり、用例として、strive for accuracy in one's work, bend to one's task, practice away at typing[the piano], turn your effort to this jobが挙げられている。ここで、どのくらいの範囲のことに応用が利くのか確認しようとして、ジャンプ検索で、「ジーニアス英和」のstrive, bend, practice, turnに移動しその用例を調べると、この和英にあったのと全く同じ用例に行き当たる。これでは英和を引く意味が失せてしまう。複数辞書検索機能は、とても良い機能なのであるから、その機能を生かせるようにしなくては宝の持ち腐れとなってしまう。和英辞典については、闇雲に定評のある紙の辞書を移植するのではなく、英和との用例の重複が無く、電子辞書ならではの検索方法を最大限に活用できるようなものを新たに開発することが必要ではないだろうか。

4. おわりに

電子辞書の検索方法は、元となった紙の辞書（今回は、ジーニアス英和大辞典かジーニアス英和辞典か）およびメーカーによって大まかな方向性はあっても、細部については、それぞれの機種ごとに異なっている可能性があることが分かった。大容量のメモリーにより、紙の辞書を丸ごと搭載してもまだ余裕のある現在の電子辞書は、どれだけ多くの紙の辞書や関連する本を収録するかということで、その価値を高めようとしているように見受けられるが、その前に、電子辞書にしかできない検索方法の改良・統一と、組み合わせる辞書の特徴・内容にも注意を払ってもらいたい。また、和英辞典については、電子辞書のメーカーと紙の辞書の出版社がお互いのノウハウを生かした全く新しい辞書を創ってもらいたい、という要望をもっておわりとしたい。

注

(1)佐々木 真氏が「こっそりこっちもカンニング---電子辞書の利用---」で述べていることも、「こっちも」とあることから、(学生も)現在のところ電子辞書をこのように利用しているという事実を暗に示しているのではないか。「(電子辞書は)授業中ちょっとした単語の意味を調べたいときに学生に話しながら辞書を操作して、調べることができるのです。しかも小さい電子辞書なら手のひらの中にすっぽり入りますから、学生にばれずにこっちもこっそりカンニングができるというわけです。ちょっと威厳を気にする先生に特におすすめできます(笑)。私が使っているSHARPのPA-J10のように名刺と同じサイズのものならポケットの中にすっぽりと入りますし、使うときには手のひらの中にも入ってしまうので、まさか辞書を見ているとはわからないはずです。」の部分は、冗談とも本気ともつかないが、いずれにせよ、学生の場合と同様、実際には、周りの人にはわからないと思いこんでいるのは自分だけということになるだろう。

(2)この電子ブックプレーヤーの拡張性の良さを取り入れようというアイデアは、現在でも一部の電子辞書に見られるし、それを望む声も一部にはある。しかし、当時と比較すると、メモリーの容量は飛躍的に大きくなり、価格も下がった結果、単体の電子辞書に70辞書を収録し、価格もそれほど高くはない製品も販売されていることを考えると、電子ブックプレーヤーのように本体とデータである辞書を別にする必要があるだろうか、疑問である。

(3)「紙の辞書」と「電子辞書」の違い---大学生はどうとらえているか

http://jiten.cside3.jp/dictionary_use/dictionary_use_top.htm (05/08/09)

電子辞書の利用実態と今後

<http://www.slis.keio.ac.jp/~ueda/semi/2004edictionary.pdf> (05/08/09)

関山 健治氏のサイト

<http://www.sekky.org/jisho.html> (05/04/10)

こっそりこっちもカンニング---電子辞書の利用---

http://www.aichi-gakuin.ac.jp/~makoto/makoto/description/edics_j.html (05/08/09)

などが比較的詳しい。

(4)生涯学習の一環としての辞書指導

http://jiten.cside3.jp/dictionary_use/dictionary_use_r.htm (05/08/09)

(5) ジャンプ機能が全ての機種に共通に備わっているとは言っても、どこにジャンプできるかというような細部については違いもあるが、紙面の制約もあり、ここでは、見出し語にジャンプするという機能のみに注目し、細部の違いは無視することとする。

(6) XD-R1300、XD-S800、IDF-4600 では、この検索方法は使えず、紙の辞書同様、見出し語を呼び出した後で用例を開いて探し、無ければまた「戻る」で入力画面にいき、同様に別の見出しをあたることになる。

(7) ライトハウス和英辞典の前書きより

参考文献

池野 宗子 新高1生徒への辞書指導

<http://www.obunsya.co.jp/argu/html/5argu5.html>(05/08/09)

小島義郎・竹林 滋(編)(1984)「ライトハウス和英辞典」研究社

小西友七(編)(1998)「ジーニアス和英辞典」大修館書店

小沼忠雄 《徹底検証》電子辞書vs印刷辞書

[http://www.kirihara-kyouikunet/peripatos/06/\(05/08/09\)](http://www.kirihara-kyouikunet/peripatos/06/(05/08/09))

佐々木 真. こっそりこっちもカンニング---電子辞書の利用---

http://www.aichi-gakuin.ac.jp/~makoto/makoto/description/edics_j.html (05/08/09)

笹原康寛,多田亜矢子,古山真麻. 電子辞書の利用実態と今後

<http://www.slis.keio.ac.jp/~ueda/semi/2004edictionary.pdf> (05/08/09)

関山 健治. Sekky's web site 2.電子辞書のメリットとデメリット

<http://www.sekky.org/jisho.html> (05/04/10)

村田 年(監)(2004)「電子辞書活用ハンドブック」カシオ計算機株式会社学販推進室

山岸 勝栄. 「紙の辞書」と「電子辞書」の違い---大学生はどうとらえているか

http://jiten.cside3.jp/dictionary_use/dictionary_use_top.htm (05/08/09)

山岸 勝栄 生涯学習の一環としての辞書指導

http://jiten.cside3.jp/dictionary_use/dictionary_use_r.htm(05/08/09)

「受理年月日 2005年9月30日」